

# Screening Producer Special Interview

## —地域の介護事業所として、認知症を考えるきっかけの一つを作りたいかった

「本人主体の当たり前ケア」を行動理念に掲げる島根県出雲市の介護事業所「セカンド・サロンえるだー」管理者・黒松慶樹さんに、地域に暮らす人たちに映画を届ける意義を伺いました。



黒松 慶樹さん  
小規模多機能型居宅介護  
「セカンド・サロンえるだー」管理者

### —上映会を開催しようと思われた理由を教えてください。

丹野さん(オレンジ・ランプの主人公のモデル)とは6~7年前から親交がありました。丹野さんの実話を基にした映画ができると伺ったのでサポーターに立候補し、上映会を開催する運びとなりました。今回は、昨年から親交のある山中しのぶさん(※自らの経験を基に介護施設の運営等に取り組んでいる若年性認知症の当事者)と丹野さんのトークセッションを聞いてみたいと思い、4月6日(土)に上映会と同時開催することにしました。

『オレンジ・ランプ』は出雲の映画館での上映期間が短く、見逃した人も含めて映画を広く観てもらえる機会を作るのは、地域密着型の介護事業所としては必要なことだと思いました。認知症とは何かを考えるきっかけの一つにしていただければ、という想いです。

### —上映会を開催してみた感想を教えてください。

映画を通じて、当初の目的どおり、皆さんが認知症を考えるきっかけが一つできたと思います。当事者の考えや心情がわかりやすく表現されているので、介護職であれば日々のケアの中で「(認知症のご本人は)こんなことを考えているのかな」と想像したり、介護をされているご家族であれば、ご本人に対して少し優しくなれたり、何かの気付きにつながるのかな、と思います。



### —参加者の方の感想等で特に印象に残っていることはありますか？

上映後、泣いている方が結構いらっしゃったのですが、認知症当事者の写真が流れるエンドロールが好評でした。当事者と出会う機会が少ない一般の方にとって、メディアで流れる暗いイメージとは異なる、笑顔の当事者の写真をたくさん見ることは、すごく良い経験になると思います。「あそこだけでも泣ける」という声も聞きました。

来場者から「印象に残った」という声が多かった劇中の台詞の一つに、「認知症って診断された日からすべて変わったんです」という主人公の言葉があります。認知症になって変わってしまうのは本人ではなく、周囲の目だということに気づかされます。

それから「私だってできることがある」という主人公の台詞。特に家族介護を経験されたことのある方々にとっては、認知症だったご家族のことを思い出して涙する、印象深い言葉になったようです。

◀左:丹野智文さん  
右:山中しのぶさん



—今後上映会を開催される主催者の皆さんに向けて、アドバイスをお願いいたします。

映画を観て終わり、ではなく、プラスワンの意味を持たせるのがいいと思います。今回の上映会では、丹野さんと山中さんをお呼びし、認知症の当事者の方のお話を聞く機会を作りました。可能であれば、独自のアンケートを作ったり、関連するパネルを展示したりすることもいいと思います。来場者にもより楽しんでもらえますし、考えを深めてもらうきっかけにもなります。

—事業所のことについて伺います。黒松さんが介護の仕事に携わるようになったきっかけを教えてください。

「えるだー」は母が設立した法人です。利用者の方が在宅で生活するためのサービスを展開していますが、認知症の方だけではなく、障がいを持つ方も受け入れ可としています。介護保険サービスが始まった頃、重度の要介護者や障がい者の生活は施設入所を前提としていました。けれど、「家で暮らしたい」という気持ちは皆同じ。ご本人の願いを叶えてあげたい、という母の思いから事業が始まっています。僕は、この事業が一代で潰れないよう、異業種から転職してきました。ただ最初は、仕事のやりがいを見いだせずに悩んでいました。

—介護の仕事と真剣に向き合うようになったきっかけは？

ある若年性認知症の方との出会いです。入社して少し経った頃の僕は、その方の自尊心や感情を尊重するケアができておらず、例えば機嫌が良くないときには、理由を考えるのではなく関わりをなるべく避ける方を選んでしまっていました。徐々にその方の症状が重くなり入院が必要になったとき、非常にお酒の好きな方だったので、在宅生活最後の日に一緒にお酒を飲みに行きました。

すると彼から、「診断されてからずっと禁酒していたから嬉しいです。お酒を飲むのは数十年先の娘の結婚式だと思っていた。すごくおいしいね」と笑顔で言われたんです。

翌朝、その方を病院にお連れしたとき、「じゃあ、行くわ」と悟ったように自ら病棟に進んで行かれました。前日に最高の笑顔を見た直後だったからこそ、「関わり方が違えば、もっと長く家にいることができたかもしれない。もっとあの笑顔を見る事が出来たのかもしれない」と強く感じました。その後悔が、僕を認知症ケアに向かわせる原動力でした。

—今は利用者の方と日々接する中で、どんなことを大事にしていっていますか？

当たり前の話ですが、利用者本人の意思を尊重することを一番大事にしています。もし認知症の方が通所中に「帰りたい」と言ったら、なぜそう言うのかを考えるようにしています。ご自宅・地域で生きていくためにご本人が必要としているサービスを提供することを心がけ、サービスを提供すること自体が目的にならないように気を付けています。

劇中の「認知症って診断された日からすべて変わったんです」という台詞に引き付けて考えると、認知症になったご本人自身は昨日と何も変わりません。認知症という診断が出たとき、変わる必要があるのは周囲の人の目だと僕は思っています。「認知症の人」として見るよりも、好きなもの・嫌いなものといった本人のパーソナルな部分を周囲が見続け、気にかけていくことを大事にしよう、といつも言っています。「えるだー」に今いてくれているスタッフは、目標を共有できる仲間です。

※上記インタビューは2024年5月に実施しました。

〈黒松 慶樹さん〉

公益財団法人の勤務を経て、母の基子さん（「認知症の人と家族の会」島根県支部世話人代表等）が運営する出雲市の介護施設に未経験で平成28年に転職。現在は「セカンド・サロンえるだー」の管理者や認知症サポーターキャラバンメイトを務め、利用者が地域で暮らし続けるためのケアサービスの実践に日々励んでいる。

～今回の取材にご協力いただいた井上さん・黒松さんの「上映会主催者インタビュー」全文は、6月以降に「ケアニン・シネマオンライン」公式サイトに掲載予定です～



参加者の声

私の母も認知症です。この映画を見て、何もかもが失われるのではないと確認しました。また母に会いに行きます

私は当事者の一人です。この映画を以前テレビで観て、とても感動して、願いが叶って上映して頂いたこと、感謝でいっぱいです。この映画を他地域の多くの方に観て頂きたいと願います

認知症という先入観・固定観念で優しさの押し売りをしてしまうのではなく、本人の意志と想いを汲み取ってあげることが大事だと気づかされました

